

蘇軾詩注解（二十）

山本和義
 蔡毅
 中裕史
 中純子
 原直枝
 西岡淳

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。
 運判朱朝奉が蜀に入るを送る（一八四七）
 病中夜 朱博士の詩を読む（一八四八）
 趙德麟 湖上に餞飲す。舟中 月に対す（一八四九）
 趙德麟が陳伝道を送るに和す（一八五〇）

朱遜之に贈る 并びに引（一七九六）

上巳の日、二子迨・過と塗山・荆山に遊び、見る所を記す（一八五一）

徐仲車に次韻す（一八五三）

林子中が春日の新堤に事を書いて寄せらるるに次韻す（一八五四）

一八四七（施三一―三三五）

送運判朱朝奉入蜀

運判朱朝奉が蜀に入るを送る

1 靄靄青城雲 あいあい せいじょうくも

2 娟娟峨嵋月 けんけん がび つき

3 隨我西北來 われしんが せいほく き

4 照我光不滅 われて ひかり 滅えず

5 我在塵土中 われじんどう うち あ

6 白雲呼我歸 はくうん われ かせ よぶ

7 我游江湖上 われこう ぼう あそ

8 明月濕我衣 めいげつ わが い うるお

9 岷峨天一方 びん が てん いっぽう

10 雲月在我側 うんげつ わ かたわら あ

11 謂是山中人 い こはさんちゅうひと

- 12 相望了不隔 あいぞ ついに隔てざらん、と
- 13 夢尋西南路 ゆめ せいはん みち たず 夢に西南の路を尋ねて
- 14 默數長短亭 もく かぞ ちやうたん てい 黙して数う 長短の亭
- 15 似聞嘉陵江 かりようこう き 嘉陵江を聞くに似たり
- 16 跳波吹枕屏 ちやうは ちんべい ふ 跳波 枕屏を吹く
- 17 送君無一物 きみ おく いちぶつ な 君を送るに一物無し
- 18 清江飲君馬 せいこう きみ うま みずか 清江 君が馬に飲わしめよ
- 19 路穿慈竹林 みち じちく はやし うが 路 慈竹の林を穿たば
- 20 父老拜馬下 ふろう ばか はい 父老 馬下に拜せん
- 21 不要驚走藏 おじろ かし おじろ 驚き走りて藏るを要らざれ
- 22 使者我友生 ししや わ ゆうせい 使者は我が友生なり
- 23 聽訟如家人 うった き かじん 訟えを聴くこと家人の如く
- 24 細說爲汝評 こま せう なんじ と ひよう 細やかに説いて汝が為に評せん
- 25 若逢山中友 も ぎんちゆう とも あ 若し山中の友に逢いて
- 26 問我歸何日 わ かえ いず ひ 我が帰らんこと何れの日ぞと問わば
- 27 爲話腰脚輕 ため はな ようきやく かる 為に話せ 腰脚輕くして
- 28 猶堪踏泉石 な せんせき ふ た 猶お泉石を踏むに堪えたり、と

元祐七年（一〇九二）五十七歳の作。知潁州として潁州にあった。

○運判 転運司判官の略称。転運司は地方の収税や裁判などを司る。判官はその次官。○朱朝奉 朱京のこと。字は世昌。南豊（江西省）の人。神宗にしばしば召されて事を論じ、監察御史に擢でられた。湖北・京西・江東の転運司判官などを歴任し、国子司業に至った。『宋史』卷三三二に伝がある。朝奉は散官の名。『蘇軾詩注解（十八）』に収める作品番号一八三二の詩の詩題の注を参照。

1 ○靄靄 雲のやわらかにたちこめるさま。「九月中に曾て二小詩を南溪の竹上に題す……」その一の注（『蘇東坡詩集』第一冊五六頁）を参照。○青城雲 青城は、蘇軾の故郷である蜀（四川省）の山名。赤城山の別称がある。岷山山脈を代表する高峰で、道教で第五洞天と呼ばれる聖地。杜甫「丈人山」詩（『杜詩詳注』卷一〇）に「青城の客と為りて自り、青城の地に唾せず、丈人山の、丹梯 幽意に近きを愛するが為なり、丈人祠西 佳氣濃やかなり、雲に縁りて住まんと擬す 最高峰」（丈人山の名は、黄帝が青城山を五岳丈人に封じたということに因む）とある。2 ○娟娟 かぼそく美しいさま。「鳳翔の八観、石鼓」詩の注（『蘇東坡詩集』第一冊三九六頁）を参照。○峨眉月 峨嵋は蜀（四川省）の山名。峨眉とも表記する。「陸龍図説の挽詞」の注（『蘇東坡詩集』第二冊九三頁）を参照。李白「峨眉山月の歌」（『李太白全集』卷八）に「峨眉山月 半輪の秋、影は平羌江水に入りて流る」とある。3 4 ○随我・照我二句 西北は、このとき蘇軾から見た青城山と峨嵋山のある方角。李白「峨眉山月の歌、蜀の僧晏が中京に入るを送る」詩（『李太白全集』卷八）に「我れ巴東・三峡に在る時、西のかた明月を看て峨眉を憶う、月は峨眉に出てて滄海を照らし、人と万里 長く相隨う」とある。6 ○白雲 隠棲者の暮らしを象徴する。9 ○岷峨一句 岷峨は、岷山と峨嵋山のこと。ここでは広く蜀の山々を指す。青城山は岷山山脈の高峰。1句の注を参照。杜甫「劍門」詩（『杜詩詳注』卷九）に「珠玉 中原に走る、岷・峨 氣 悽愴たり」とある。天一方は、互いに遠く離れていること。蘇武「詩四首」（『文選』卷二九）その四に「良友 遠く離別し、各おの天の一方に在り」とある。11 12 ○謂是・相望二句 一韓智翹は「雲月ノ相隨（フ）ハ、坡ハ蜀ノ山中ノ人デ、我ト同郷（ノ）人デアルト雲月ガ思（ヒ）テ、サテ隔テズシテ相隨（フ）ゲナゾ。雲月ノ意ヲ坡ガ推量シテ云（フ）ゾ」と記す（『四河入海』卷二の二）。13 14 ○夢尋・默数二句 西南は蜀をさす。例えば「宝鶏県の斯飛閣に題す」詩（『蘇東坡詩集』第一冊三二七頁）に「西南

の帰路 遠くして蕭条、檻に倚れば魂は飛んで招く可からず」という。亭は、宿場、はたご。その間隔の長いものを長亭、短いものを短亭といった。「孔郎中が陝郊に赴くを送る」詩の注『蘇東坡詩集』第四冊四六七頁を参照。15 ○嘉陵江 陝西省に源を発して蜀を流れ、重慶で長江に注ぐ大河。「子由が、顔長道とともに百歩洪に遊び、地を相て亭を築き柳を種う」に和す」詩の注『蘇東坡詩集』第四冊二五〇頁を参照。16 ○枕屏 枕びょうぶ。歐陽修「沈遵に贈る 并びに序」詩『歐陽文忠公集』卷六に「時有りて酔倒して溪石に枕し、青山白雲をば枕屏と為す」とある。19 ○慈竹 中国西南部に分布する竹の一種。その叢生するさまを親子の慈愛深さに喩えてかく称するとされ、慈孝竹、子母竹ともいう。唐・王勃に「慈竹の賦」がある『王子安集』卷二。22 ○友生 友のこと。『詩経』小雅「常棣」に「兄弟有りと雖も、友生に如かず」とある。23 ○聽訟一句 家人は、家の者、家族。『詩経』周南「桃夭」に「之の子 于き婦がば、其の家人に宜しからん」とある。また、『旧唐書』陽城伝に「家人の法を以て吏人を待ち、宜しく罰すべき者は之を罰し、宜しく賞すべき者は之を賞し、簿書を以て意に介せず」とある。

青城山を取りまく豊かな雲と蛾眉山に懸かるたおやかな月は、あの西北の彼方からついてきて、光を失うことなく私を照らしている。

私がこの塵土の世俗にあって役人暮らしをしているのをみて、白雲は「故郷に帰ってこい」と呼びかける。私が江湖のほとりに遊べば、明月が私の着物をしっとりと照らす。

岷峨の山は天の果てにあるけれど、雲と月とは我がかたわらにある。雲月はいう、「これぞ山中の人、遠く望んではいても互いに隔たつてなぞいない」と。

夢に西南の郷里への道をたどって、遠かったり近かったりする宿場の数を静かにかぞえていた。嘉陵江におどる波の音が、枕元に聞こえるかのようだった。

去りゆくあなたには何もあげられませんか、せめてお馬に清らかな長江の水を飲ませてやって下さい。や

がて慈竹^{じちく}の林を抜けていらっしやれば、蜀の父老はお馬のもとに伏し拝みましよう。
父老たちよ、驚いて逃げかくれするには及ばない。この天子の使者どのは私の友なのだよ。家族の話を聞く
ように訴えに耳をかたむけ、お前たちに細かく説明をして取り決めてくれるだろう。
もし山に住む私の友人にお逢いになって、東坡^{わたし}はいつ帰ってくるのかと聞かれたなら、足腰はけっこう健や
かで、まだまだ山水の勝地を歩けるとお答え下さい。

一八四八（施三一—三二）

病中夜讀朱博士詩

病中^{びやうちゆう} 夜^{よる} 朱博士^{しゆはくし}の詩^しを讀^よむ

- | | | |
|---|-------|---|
| 9 | 曾坑一掬春 | 曾坑 ^{そうこう} 一掬 ^{いつきく} の春 ^{はる} |
| 8 | 哀音餘摻搗 | 哀音 ^{あゐん} 摻搗 ^{さんた} を余 ^{あま} す |
| 7 | 巧笑在頰頰 | 巧笑 ^{こうしやう} 頰頰 ^{へいきやう} に在 ^あ り |
| 6 | 可識不可誇 | 識 ^し る可 ^べ く 誇 ^{ほこ} る可 ^べ からず |
| 5 | 古語多妙寄 | 古語 ^{こご} 多妙 ^{みよう} 寄 ^き お |
| 4 | 淨我空中花 | 我 ^わ が空 ^{くう} 中 ^{ちゆう} の花 ^{はな} を淨 ^{きよ} らかにす |
| 3 | 君詩如秋露 | 君 ^{きみ} が詩 ^し は秋露 ^{しゆうろ} の如 ^{ごと} く |
| 2 | 細書數塵沙 | 細書 ^{さいしよ} 塵沙 ^{じんさ} を數 ^{かぞ} う |
| 1 | 病眼亂燈火 | 病眼 ^{びやうがん} 燈火 ^{とうか} 乱 ^{みだ} れ |

- 10 紫餅供千家 紫餅しへい 千家せんかに供す
 11 懸知貴公子 懸はるかに知る 貴公子きこうし
 12 醉眼無眞茶 醉眼すいがんに眞茶しんちや無きを
 13 崎嶇爛石上 崎嶇きくたる爛石らんせきの上
 14 得此一寸芽 此この一寸いっすんの芽めを得
 15 緘封勿浪出 緘封かんふうして浪みだりに出いだす勿なかれ
 16 湯老客未嘉 湯ゆ 老おいたりとも 客かく 未いまだ嘉かならずんば

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○朱博士 伝未詳。査慎行は朱勃（作品番号一七九六「朱遜之に贈る」詩の注を参照）のことかという。博士は、学を講ずる官で、分野は多岐にわたる。

4 ○空中花 かすみ目の症状をいう。『円覚経』（『大正蔵』第一七卷）に「譬えば彼の病目の、空中の花と第二の月とを見るがごとし」とある。5 ○妙寄 思いのたけを絶妙に託すること。蘇軾以前に用例を見ない。7 ○巧笑 につきりと笑うこと。『詩経』衛風「碩人」に、「巧笑 倩せんたり、美目 盼へんたり」とある。○類類 宋玉「神女の賦」（『文選』卷一九）に「嬋へいとして薄いささか怒りて以て自ら持し、曾て犯干はんかんす可からず」とあり、その李善注に『方言』を引いて「嬋は、怒色の青き貌かたちなり」という。これに従って一韓智翹は一句の意を「若（シ）美人ノ顔色ヲ以テ朱ガ詩ニ譬ヘバ、怒ル中ニ巧笑ノ美アルガ如ク也」と記す（大岳周崇の説。『四河入海』卷二五の三）。今これに従う。8 ○哀音 哀しい音色。また、澄んだ音色。後漢・繁欽「魏の文帝に与うる箋」（『文選』卷四〇）に、「潜氣 内に転じ、哀音 外に激す」とある。○摻搗 後漢の禰衡が奏した鼓曲「漁陽摻搗」のこと。『世説新語』言語篇に「禰衡 魏武に謫せられて鼓吏と為り、正月半なかばに鼓を試さる。衡 枹ふ（ばち）を揚げて「漁陽摻搗」を為すに、淵淵として金石の声有り、四座よれ之が為に容を改む」とあり、劉孝標が引く『典略』はその音色について、「鼓声甚はなはだ悲しく、音節殊ことに妙なり、

坐客 忼慨せざるは莫し」と記す。9 ○曾坑 北苑（福建省建安の鳳凰山にあった官營の茶園）の地名で、その地に産する茶の名称でもある。慶暦年間に北苑に編入されてから、毎歳「曾坑の上品一斤」を進貢したという（宋子安『東溪試茶錄』北苑）。併せて「蔣夔が茶を寄するに和す」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊六一〇頁）を参照。○一掬 両手にひとすくい。「一掬の春」は、曾坑で摘まれた新茶のこと。韓愈「炭谷湫の祠堂に題す」詩（『韓昌黎集』卷五）に、「巨靈 其れ高く捧げ、此の一掬の壑を保つ」とある。また、陸游「北窓」詩（『劍南詩稿』卷五七）には、「名泉 吾が児の意に負かず、一掬の丁坑 手自ら煎る」（丁坑は茶の名）という言い方がみえる。10 ○紫餅 むらさき色の団茶。「焦千之 惠山泉の水を求む」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三〇五頁）を参照。前の句の曾坑と同じく、いわゆる銘茶の類である。11 12 ○懸知・醉眼二句 前句の注に引く「焦千之 惠山泉の水を求む」詩には、「貴人 高宴罷んで、醉顔 紅緑乱る、赤泥 方印を開き、紫餅 円玉を載る、甌を傾けて共に嘆賞し、窃かに語って僮僕を笑わしむ」と、醉眼朦朧たる貴人たちが、酔いざましに銘茶を飲んでもその味など分らず、下僕たちに笑われるのをうたった一節がある。この二句もそれに類した意味であろう。13 14 ○崎嶇・得此二句 崎嶇は、山道が険しく平坦でないさま。爛石は、くずれた石。陸羽『茶経』卷上「源」に、「其の地は、上者は爛石に生じ、中者は礫壤に生じ、下者は黄土に生ず」とある。二句は、朱博士の詩が得がたく世に知られないことを、よい茶に喩えていう。15 ○緘封 とじる。封をする。蔵して人に見せないこと。16 ○湯老 陸羽『茶経』卷下「煮」に、「其の沸は、魚目の如くして微しく声有るを一沸と為す。縁辺 湧泉連珠の如きを二沸と為す。騰波鼓浪を三沸と為す。已上は水老いて食らう可からざるなり」とある。

病んだ眼には燈火が千々に乱れて、細かい字はまるで砂ぼこりがならんでいるようだ。そんなおり、あなたの詩は秋に置く露のように、我がかすみ目に浮かぶ空中の花を洗い流してくれた。

古語を借りて思いのたけを絶妙に託したその詩は、その意を知ることができるが、人々に吹聴すべきものではない。怒りで顔色を変えるなかに愛らしい笑いがあり、澄んだ音色のなかに悲壮な「摻搗」の鼓の音があふ

れているようだ。

曾坑の茶は一掬いの春を楽しむもの、むらさき色の膏を塗った評判の団茶は多くの家々に供される。やんごとなき自分の若様などは、その酔眼に本物の茶が見分けられようはずもない。それは険しい山道のさき、くずれた石の上に、やっと一寸ほどの芽を吹くものなのだ。しっかりと封をしてみだりに外にお出しにならぬよう。湯が沸かしすぎになっても客が佳くなければ無理に出すこともないのだから。

(担当 西岡 淳)

一八四九(施注三一―三七)

趙德麟餞飲湖上舟中對月

趙德麟

湖上に餞飲す。舟中 月に對す

- | | | | | |
|---|-------|--------|------------|----------|
| 1 | 老守惜春意 | ろうしゅ | 春を惜しむ意 | はる |
| 2 | 主人留客情 | しゅじん | 客を留むる情 | かく おもひ |
| 3 | 官餘閑日月 | かんよ | 日月閑かなり | じつげつ |
| 4 | 湖上好清明 | こじょう | 清明好し | せいめい |
| 5 | 新火發茶乳 | しんか | 茶乳を發し | ちやにゅう はつ |
| 6 | 溫風散粥錫 | おんふう | 粥錫を散す | しゅくくわ さん |
| 7 | 酒闌紅杏闇 | さけ たげな | 酒闌にして紅杏闇く | さけ たげな |
| 8 | 日落大隄平 | ひ お | 落ちて大隄平らかなり | だいてい たい |

9 清夜除燈坐

清夜^{せいや} 燈^{とう}を除^のけて坐^ざし

10 孤舟擘岸撐

孤舟^{こしゅう} 岸^{きし}を擘^はいて撐^{さか}す

11 逮君幘未墮

君^{きみ}が幘^{さく}の未^{いま}だ墮^おちざるに逮^{おそ}んで

12 對此月猶橫

此^こに月^{つき}の猶^なお横^{よこ}たわるに對^{たい}す

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。新たに知揚州に除せられて、潁州から舟で揚州に向かうにあたって、この詩を詠じた。

○趙德麟 趙令時のこと。德麟はその字。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。

○湖上 湖は、潁州の西湖をいう。○餞飲 主人として送別の宴を開くこと。姚合「王求を送る」詩（『全唐詩』巻四九六）に、「羸馬^{るいば} 郭門を出でて、餞飲 暁より夕べに連なる」とある。

1 ○老守 年老いた太守。蘇軾自らをいう。蘇軾は、知密州であった熙寧八年（蘇軾四十歳）の作とされる「郡人田・賀の二生が花を献ずるに謝す」詩（『蘇東坡詩集』第二冊五一二頁）においてすでに自らを「老守」といい、その後も時折この語を用いている。2 ○主人 任地に赴く蘇軾を見送る側の趙德麟をいう。3 ○官余一句 知潁州を退任して次の任に就くまでの間、しばらくは事もなくゆったりと時を過ごすことをいう。白居易「洛陽に愚叟有り」詩（『白居易集箋校』巻三〇）に、「此れ従り身を終えるに到るまで、尽く閑たる日月と為さん」とある。5 6 ○新火・温風 二句 二句は清明節の習俗をうたったもので、白居易「清明の日」に韋侍御の虔州に貶せらるるを送る」詩（『白居易集箋校』巻一七）に、「餞^{あめ}を留めて冷粥^{れいしゆく}に和し、火を出だして新茶を煮る」とあるのを踏まえている。新火は、寒食の禁火が明けて、清明節に皇帝から百官に賜る火。『蘇軾詩注解（五）』に収める作品番号一六五一の詩の注を参照。茶乳は、茶をたてた時にできる乳状のおどみのこと。蘇軾「越州張中舍が壽樂堂」詩（『蘇東坡詩集』第二冊二二六頁）に、「春は濃く睡り足って 午窓明らかなり、想見す 新茶の乳を潑せるが如きを」とある。その注も参照。温風は

暑さの和らいだ季夏の風をいう。『礼記』月令「季夏之月」に、「温風始めて至る。蟋蟀 壁に居り、鷹 乃ち習を学び、腐草 蛸と為る」とある。ここでは春の訪れを感じさせる温かな風と解する。粥餠は、粥にあめを加えて甘くしたもの。蘇軾「田国博部夫が南京より寄せらるるに次韻す 二絶」その二（『合注』卷一八）に、「火は冷たく餠は稀にして杏粥は稠し、青裙縞袂 田頭に餉す」とあり、王注に『玉燭宝典』を引いて、「寒食に大麦の粥を煮て、杏仁を研いで酪と為し、別に餠を造りて之に沃ぐ」とある。7〇酒闌 酒宴が終わりに近づく頃あい。『漢書』高帝紀に、「酒闌にして、呂公 因りて目して固く高祖を留む」とあり、文穎の注に「闌は希なるを言うなり。酒を飲む者の半ばは罷かりて半ばは在るを謂う。之を闌と謂う」とある。〇紅杏闇 日が没して紅い杏花も見えなくなったことをいう。白居易「寒食の夜」（『白居易集箋校』卷二四）に、「月無く燈無し 寒食の夜、夜深くして猶お闇花の前に立つ」とある。8〇大隄平 劉禹錫「踏歌行 四首」その一（『劉禹錫集箋註』卷二六）に、「春江 月は大隄の平らかなるに出で、隄上 女郎 袂を連ねて行く」とある。9〇清夜 清らかな夜。杜甫「醉時の歌」（『杜詩詳注』卷三）に、「清夜 沈沈 春酌を動かし、燈前の細雨 簷花落つ」とある。10〇壁岸 岸から離れていること。蘇軾「秦太虚・參寥と松江に会して関彦長・徐安中の適たま至る。韻を分かちて風の字を得たり 二首」その二（『合注』卷一八）に、「平生 睡りは足る 江に連なる雨、尽日 舟は横たう 岸を擘く風」とあり、王注に引く趙次公注に「風吹いて舟をして岸を離れしむ、之を岸を開くと謂う。「岸を擘く」とは乃ち岸を開くの義なり」とある。11〇逮君一句 趙德麟どのが酔い潰れてしまう前にといいほどの意味。幘は頭巾。『晉書』庾敳に、「敳乃ち頽然として已に酔い、幘机上に墮つ、頭を以て就きて穿取す」とある。

老いた太守であるわたくしには移り行く春を惜しむ心、饒の宴の主人である徳麟どのには潁州を離れるわたしとの名残を惜しんでくださるお気持ち。潁州での任期も終わって過ぎすゆったりとした日々に、西湖で迎え

る清明の風情はすばらしいものです。

寒食明けに新たにおこした火で乳状になる上等な茶を煮て、春の温かな風に甘い粥の香りが漂います。宴も果てようとする頃には杏の花の紅も闇につつまれて、入り日は平らかにうち続く堤に落ちかかっています。

この清らかな夜に燈を点じずに座り居て、われわれの舟だけが岸を離れて湖面に浮かんでいます。あなたが酔って頭巾を落としてしまうまで、水平線に横たわる下弦の月とこのまま向かい合っていたいものです。

一八五〇（施注三十一—三九）

和趙德麟送陳傳道

趙德麟が陳伝道を送るに和す

- | | | |
|---|-------|------------|
| 9 | 那知有聚散 | 那なぞ知らん 聚散あ |
| 8 | 茲游實清醇 | 茲の遊びは実に清醇 |
| 7 | 俗物敗人意 | 俗物は人の意を敗り |
| 6 | 傾寫出怪珍 | 傾写して怪珍を出だす |
| 5 | 五君從我游 | 五君 我に従いて遊び |
| 4 | 世有籀雲麟 | 世よ雲を籀む麟有り |
| 3 | 王孫乃龍種 | 王孫は乃ち龍種 |
| 2 | 兩歐惟德人 | 両欧 惟れ徳人 |
| 1 | 二陳既妙士 | 二陳 既に妙士 |

- 10 佳夢失欠伸 かむ けんしん 佳夢も欠伸に失す
 11 我舟下清淮 わが ふね せいはい 我が舟、清淮を下り
 12 沙水吹玉塵 さすい きよふくし 沙水、玉塵を吹く
 13 君行踏曉月 きみ ゆ あかつき つき 君は行きて暁の月を踏み
 14 疎木挂寸銀 そぼく すんぎん 疎木に寸銀を挂く
 15 尙寄別後詩 な べつご 尙お別後の詩を寄せて
 16 剪刻淮南春 わいなん はる せんこく 淮南の春を剪刻せん

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○趙德麟 趙令時のこと。德麟はその字。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。
 ○陳伝道 陳師仲のこと、伝道はその字。『蘇軾詩注解（十九）』に収める作品番号一八四四の詩の詩題の注を参照。
 1 ○二陳 陳師仲とその弟である陳師道のこと。陳師道については、『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八五の詩の詩題の注を参照。○妙士 節義があつて徳の高い人物をいう。曹植「画說」〔『太平御覽』卷七五二〕に、「高節妙士を見れば、食を忘るること莫し」とある。2 ○両欧 欧陽棐とその弟である欧陽辯のこと。兩人については、『蘇軾詩注解（十三）』に収める作品番号一七八七の詩の詩題の注を参照。○徳人 有徳者。『莊子』天地篇に、「徳人とは、居りて思ふこと無く、行きて慮ること無く、是非美惡を蔵せず」とある。3 ○王孫 宋の太祖の子燕懿王の玄孫にあたる趙德麟のこと。蘇軾は「趙景貺が檜を栽うるに和す」詩〔蘇軾詩注解（十五）〕や「趙德麟が雪中に梅を惜しみ、且つ柑酒を餉るに次韻す 三首」その三〔蘇軾詩注解（十九）〕でも、趙德麟を王孫と詠じている。○龍種 皇帝の一族であること。杜甫「哀王孫」〔『杜詩詳注』卷四〕に、「高帝の子孫は尽く高準、龍種は自ずと常人と殊なり」とある。4 ○籀雲 籀は、躡（あとを追う）の意。『漢書』礼楽志に引く「郊祀歌」「元狩三年、馬渥注の水中に生ずる作」に、「志は傲儼にして、精は権奇なり、浮雲を籀んで唵として上り馳す」とあり、蘇林注に「籀の音は躡

天馬上りて浮雲を躡むを言うなり」とある。5〇五君 顔延之に「五君の詠」（『文選』卷二一）があり、五君は阮籍・嵇康・劉伶・阮咸・向秀をいう。蘇軾はこれを踏まえつつ、潁州とともに詩を詠じた陳師仲・陳師道・歐陽棐・歐陽辯・趙令時を五君という。〇從我游 白居易「閑居」詩（『白居易集箋校』卷六）に、「誰か能く我に従いて游はん、君をして心に事無からしめん」とある。蘇軾は、「徑山自り回り、呂察推の詩を得て、其の韻を用い、之を招いて湖上に宿せしむ」詩（『蘇東坡詩集』第二冊二八九頁）でも、「君能く我に従いて遊ぶ、郭を出でて未だ黒からざるに及べ」と詠じている。6〇傾写 心中の思いを余さずに述べること。『世說新語』賞誉篇に「王司州 殷中軍と語り、歎じて云う、「己の府奥は早已に傾写す」とある。〇怪珍 珍しく貴重なもののこと。『史記』范雎伝に、「（穰侯）千乗有余にして関に到る。関 其の宝器を閲するに、宝器珍怪 王室より多し」とある。7〇俗物一句 『世說新語』排調篇に、「嵇（康）・阮（籍）・山（濤）・劉（伶）竹林に在りて酣飲す。王戎 後れて往く。（阮）歩兵曰く、「俗物已に復た来りて人の意を敗る」と。王（戎）笑いて曰く、「卿輩の意も亦た復た敗る可きか」と」とある。8〇茲游 韋応物「西郊燕集」詩（『韋江州集』卷一）に、「同心の友と眷言すれば、茲の遊び 安くんぞ忘るる可けんや」とある。〇清醇 嵇康「琴の賦」（『文選』卷一八）に、「蘭肴 兼ねて御し、旨酒 清醇なり」とあるように、もともと酒が芳醇で美味であることをいうが、ここでは蘇軾と五君の遊びが清らかで趣あることをいう。9〇聚散 人が集まることと別れること。白居易「始めて主客郎中、知制誥に除せられ、王十一・李七・元九の三舎人と中書に同に宿して旧き感懷を話す」詩（『白居易集箋校』卷一九）に、「閑宵 静かに話して喜び還た悲しむ、聚散と窮通とは自ずから知られず」とある。また『蘇軾詩注解（二）』に収める作品番号一六〇七の詩の注も参照。10〇佳夢一句 よい夢を見ている、欠伸を一つすれば目が覚めてしまうこと。欠伸はあくびとのび。沈既濟『枕中記』（『太平広記』卷八二）に引く『異聞集』に、盧生が呂翁から授けられた枕をして眠り、榮耀榮華を極めて一生を終える夢を見たが、「（盧生）欠伸して寤む。見るに方に邸中に偃す。呂翁を顧みるに傍らに在り。主人 黄粱を蒸すに尚お未だ熟さず」とあるのを踏まえる。11〇清淮 淮水の清らかな流れ。韓愈「僧澄観を送る」詩（『韓昌黎集』卷七）に、「清淮は波無く平かなること席の如く、欄柱は傾扶して半天赤し」とある。下清淮は、新たな任地である揚州に向かうことをいう。12〇

沙水 沙の上を流れる澄んだ水。杜甫「覃二判官を送る」詩その二（『杜詩詳注』巻三二）に、「魂は断ゆ 航舸の失
 わるるに、天寒くして沙水清し」とある。○玉塵 白居易「皇甫十が早春に雪に對して贈らるるに酬ゆ」詩（『白居
 易集箋校』巻三四）に「漠漠として復た雰雰 東風 玉塵を散らす」とあるように、風に舞う雪をいうことが多いが、
 ここでは「韓智翊の聞書（『四河入海』巻二二の二）に、「或ル説二ハ、淮ノ沙水ヲ風ガ吹（イ）テ、雪ノ如クナト云
 （フ）心ゾ」とあるのに従う。13○踏曉月 明け方の月あかりに道を行くこと。白居易「夏の夜に宿直す」詩（『白居
 易集箋校』巻一九）に、「寂寞 燈を挑（か）けて坐し、沈吟 月を踏んで行く」とある。14○疎木一句 枝のまばらな樹
 木に月がかかっているさま。蘇軾は「妓楽を携えて張山人の園に遊ぶ」詩（『蘇東坡詩集』第四冊五五九頁）で、「酒
 闌にして人散じ 却って門を閑し、寂歴たる斜陽 疎木に挂かる」と、夕日がまばらな木々の枝にかかるさまを詠じ
 ている。15○別後詩 劉禹錫「同州に相遇うを喜ぶ」に酬いて樂天と替代す」詩（『劉禹錫集箋証』外集巻四）に、
 「別後に 詩 帙を成し、携え来たりて 酒 壺に満つ」とある。16○剪刻 韓愈「李花 二首」その二（『韓昌黎集』
 巻五）に「誰か平地の万堆の雪を將て、剪刻して此の天に連なる花を作れる」とあるように、造物主が自然の景物を
 見事に仕立てることをいう。ここでは詩人が題材に手を加えて巧みに詩文に取り入れること。○淮南 揚州のこと。
 揚州は淮南路の行政の中心地であった。

伝道どのと履常どののお二人は節義あって才徳すぐれた人物であり、叔弼どのと季黙どののお二人もまた有徳
 の人物です。徳麟どののは帝室の血を引くお方であって、どの世代にも雲を追って天を駆ける麒麟の如き人物が
 出るものです。

この五人の方がわたしについてあちこちと出かけてくださって、思いを余すところなく表わして貴重な詩を
 ひねり出してくださいました。俗物が混じると興がさめるものですが、わたしたちの詩の遊びは清らかで情趣
 にあふれていました。

出会いがあれば別れもあるとは何としたこと、すばらしい夢も一つあくびをして伸びをすれば失われてしま

います。わたしの舟は淮水の清らかな流れを下っていますが、沙の上を流れる水が美しいしぶきとなって舞っています。

伝道どのは月を踏んで明けやらぬ夜道を行かれますが、まばらな木々の枝には下弦の月がかかっていることでしょう。お別れた後にも詩を差し上げて、揚州の春を読み込んで進ぜましょう。

（担当 中 裕史）

一七九六（施三一—三八）

贈朱遜之并引

朱遜之に贈る 并びに引

元祐六年九月、與朱遜之會議於穎、或言洛人善接花、歲出新枝、而菊品尤多、遜之曰、菊當以黃爲正、餘可鄙也、昔叔向聞驪蔑一言、知其爲人、予於遜之亦云、

元祐六年九月、朱遜之と穎に會議す。或るひと言う、「洛の人善く花を接ぎ、歳どし新枝を出だし、而も菊品尤も多し」と。遜之曰く、「菊は當に黄を以て正と爲すべく、余は鄙しむ可きなり」と。昔叔向は驪蔑が一言を聞きて、其の人と爲りを知れり。予 遜之に於ても亦た（しか）云う。

元祐六年（一〇九二）、五十六歳の作。

○贈朱遜之并引 『統集』のテキストでは「五色の菊、朱遜之に贈りて韻に次ぐ」と題されており、次韻詩であったことが示されている。さらに「引」の部分も欠落している。○朱遜之 朱勃のこと。遜之はその字。時に穎州を含む

地域である京西北路の転運判官であった。○会議 議題について話し合うこと。ここでは淮河の増水による水害を防ぐために八丈溝を開くか開かないかその利害について議論がなされた。元祐六年十月に提出された蘇軾「八丈溝の開く可からざるを論ずるを奉る状」(『蘇軾文集』卷三三)には、その会議の出席者として知潁州である蘇軾のほか、知陳州の李承之、府界提刑の羅適、都水監所差官や京西北路の提刑、轉運司が挙げられている。聞く意見が多数を占めるなか、蘇軾は聞くべきでないとする朱勃に賛同している。○洛人接花 洛陽では枝を接いで多彩な花を作っていた。歐陽修『洛陽牡丹記』「風俗記」(『歐陽文忠公文集』卷七二)に「洛陽の俗、大抵花を好み、春時、城中に貴賤無く皆な花を挿す。……大抵洛人の家家は花有るも、而して大樹ある者少なし。蓋し其れ接がされば則ち佳からず。……秋に至りて乃ち接ぐ。花を接ぐ工の尤も著しき者は之を門園子と謂う」とある。○菊品尤多 人の手で改良された花のなかで、菊の品種がもっとも多い。宋の史鑄『百菊集譜』の冒頭に「洛陽品類」の解説があり、紫菊や葉紅菊、粉紅菊など二十六種類もの菊が記されている。○叔向聞醜蔑一言 叔向は春秋時代管国の羊舌肸の字。醜蔑は鄭大夫、醜明・然明とも言われる。『春秋左氏伝』昭公二十八年に「昔叔向鄭に適きしとき、醜蔑悪く、叔向を觀んと欲して、使の器を収めんとする者に從つて、往きて堂下に立つ。一言して善し。叔向將に酒を飲まんとして、之を聞いて曰く、「必ずや醜明ならん」と。……下りて其の手を執りて以て上らせて曰く、「……夫れ今子は少しく颺らず、子若し言無くんば、吾れ幾ど子を失わん。言の以て已む可からざるや、是くの如し」と。遂に故知の如し」とある。その人間のありようをその人の発した一言で察知することをいう。

元祐六年の九月に、朱勃と潁州において議論した。洛陽の人は接ぎ木がうまく、年々新しいものを作りだし、なかでも菊の品種がもっと多いという人があった。朱勃は、菊は黄色を正色とすべきで、ほかは卑しむべきだと言った。その昔、叔向が醜蔑の一言を聞いて、その人となりを知ったように、わたしは朱勃についてもまたそのすぐれた人柄を知った。

- 1 黃花候秋節
 2 遠自夏小正
 3 坤裳有正色
 4 鞠衣亦令名
 5 一從人僞勝
 6 遂與天力爭
 7 易性寓非族
 8 改顏隨所令
 9 新奇既易售
 10 粹駁宜相傾
 11 疾惡逢伯厚
 12 識真似淵明
 13 君言我所印
 14 世論誰敢評
 15 願君爲霜風
 16 一掃紫與頰
- 1 黃花 秋節を候うは
 2 遠く夏小正自りす
 3 坤裳に正色有り
 4 鞠衣も亦た令名
 5 一たび人の偽り勝つて従り
 6 遂に天の力と争う
 7 性を易えて族に非ざるに寓し
 8 顔を改めて令する所に随う
 9 新奇 既に售り易く
 10 粹・駁 宜ど相傾けん
 11 惡を疾んで 伯厚に逢い
 12 真を識りて淵明に似たり
 13 君が言 我が印する所なり
 14 世論 誰か敢て評せん
 15 願わくは 君 霜風と為つて
 16 紫と頰とを一掃せよ

1〇黃花一句『礼記』月令に「季秋の月、……鞠に黃華有り」とある。李紳「滌陽に守たりて、深秋に郡城に登りて瑯琊を望むを憶う」詩（『追昔遊集』卷上）に「菊は秋節を迎えて 西風急に、雁は砧声を引いて 北思多し」と

ある。黄色の菊花が秋の到来を告げるをいう。2〇夏小正『大戴礼』卷二の篇名。その九月の条に「鞠榮く。鞠は草なり。鞠は榮きて麥を樹う。時の急なり」とある。3〇坤裳 黄色のスカート。『周易』坤卦の爻辞に「六五 黄裳、元吉なり」とあり、象伝に「黄裳、元吉なりとは、文 中に在ればなり」とある。〇正色 青・赤・黄・白・黒をいう。礼服や礼装の規定を述べた『礼記』玉藻に、「衣は正色、裳は間色」とあり、孔穎達の引く皇侃の説に「正は青・赤・黄・白・黒の五方の正色を謂うなり」とある。4〇鞠衣 むかし儀礼に使われた衣装。『周礼』天官「内司服」の王后の六服の一つに鞠衣があり、鄭司農は「鞠衣は黄衣なり」と、鄭玄は「鞠衣は黄桑の服なり。色は鞠塵の如く、桑の葉の始めて生ずるを象る。月令に、三月、鞠衣を上帝に薦めて、桑事を告ぐ」と注する。5〇人偽 人為と同じく、天然自然に対して、人が手を加えることをいう。揚雄『法言』問明篇に「命は天の命なり。人為に非ざるなり」とある。7〇易性 『合注』は易性につくるが、『施注』卷三一に従って易性とする。本質を変えてしまうこと。元稹「分水嶺」詩（『元氏長慶集』卷一）に「時を易えるも性を易えず、邑を改めるも名を改めず」とある。ここでは、改良された菊をいう。〇非族 祖先を同じくする一族ではないこと。『春秋左氏伝』僖公十年に「神は非類を歆けず、民は非族を祀らず」とある。孔穎達の疏に「伝に称す、我が族類に非ずして、其の心必ず異なる、と。則ち族類は一人」とある。8〇改顔 表情を変えてしまうこと。蘇軾「老翁の井」詩（『合注』卷四七）に「顔を改め服を易えて世と同じ、世人をして翁有るを知らしむる母かれ」とある。10〇粹駁 純粹なものと雑然たるもの。『荀子』王霸篇に「粹たれば王たり。駁たれば霸たり。一も無ければ亡ぶ」とある。その楊倞の注に「粹は全きなり」、「駁は雑なり」とある。〇宜相傾 宜は、おおかた、ほとんどの意。相傾は互いに退けあうこと。『旧唐書』竇申伝に「兵部侍郎の陸贄は（贄）参と隙有り。吳通微弟兄と（陸）贄は同じく翰林に在って、俱に德宗の顧遇を承け、亦た寵を争いて協わす。金吾大將軍、嗣號王則之は（贄）申及び通微・通玄と善く、遂に相与に傾く」とある。11〇伯厚 朱震のこと。伯厚はその字。後漢の陳留（河南省）の人。悪を憎む人として取り上げられている。『後漢書』陳蕃伝に「（朱）震、字は伯厚、初め州の從事と為るや、済陰の太守單匡の臧罪を奏し、并せて匡の兄、中常侍・車騎將軍の超も連なる。桓帝、匡を収えて廷尉に下し、以て超を譴む。超、獄に詣って謝ぶ。三府の諺に曰く、「車は鶏の棲の如く、馬は狗

の如きも、悪を疾むこと風の如きは朱伯厚」とある。12〇識真一句 陶淵明「飲酒 二十首」その五（『陶淵明集』卷三）に「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る、……此の中に真意有り、弁ぜんと欲して已に言を忘る」とある。菊と陶淵明の真を識ることが結びつけられている。13〇印 仏が承諾する印可のこと。広く同意する意に用いる。『維摩經』弟子品（『大正藏』第一四卷）に「煩惱を断たずして涅槃に入る、是れを宴坐と為す。若し能く是くの如く坐せば、仏の印可する所なり」とある。胡仔『茗溪漁隱叢話』（前集卷四一）に「茗溪漁隱曰く、菊は黄を以て正と為す、余は皆な鄙しむ可し。此れ朱遜之の語なり。東坡 印可して詩を作りて之に贈る」とあるように、印を印可としている。15〇霜風 菊を枯らす霜の気を含んだ冷たい風。韓愈「土を薦む」詩（『韓昌黎集』卷二）に「霜風 佳菊を破り、嘉節 吹帽に迫る」とある。蘇軾「蝗を捕えて浮雲嶺に至る……」一首「其二（『蘇東坡詩集』第三冊三五七頁）に「霜風漸く重陽を作さんと欲し、燭燭として溪辺に野菊黄なり」とある。ここでは伯厚の注で示したように「悪を疾むこと風の如きは朱伯厚」の風とを合わせて、黄菊以外の不正なものを枯らしてしまう冷たい風をいう。16〇頽 赤の菊をいう。頽については、『蘇軾詩注解（十四）』に収める作品番号一八〇二の注を参照。

黄菊は秋の季節の指標であるとするのは、いにしえの「夏小正」以来のこと。「坤裳」には正色があり、「鞠衣」もまた評価は高い。

ひとたび人間の技が勝つてからは、天と力を競うようになってしまった。本来の持ち前を変えて（菊の）仲間でなくなってしまうと、顔かたちまで変えて意のままに従うしなう。

その目新しさゆえに、人々はこぞって飛びつきますが、純ないろのはなも、雑色のそれも、たいていは互いに退け去ってしまうのです。朱勃どのは「悪を憎むは朱伯厚」さながら、真実を見極める力は陶淵明のよう。あなたのご意見はわたくしの保証するところ、世の有象無象のやからがどうして批判できましよう。どうか霜の気を含んだ厳しい風となって、紫や赤の菊を一掃してください。

一八五二(施三一一)

上巳日與二子迨過遊塗山荊山記所見

上巳の日、二子迨・過と塗山・荊山に遊び、見る所を記す

- | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|----------|-------|----------|----------|--------|--------|---------|-------|-------------|-----------|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 別人有餘坑 | 楚水清可亂 | 荊山碧相照 | 尙記弧矢旦 | 可憐淮海人 | 夏郊亦薦禱 | 秦祖當侑坐 | 像設偶此粲 | 從祀及彼呱 | 復作微禹嘆 | 謁來乘櫟廟 | 還軫天下半 | 此生終安歸 |
| 別人 | 楚水 | 荊山 | 尙お | 憐れむ | 夏の郊 | 秦祖 | 像設 | 從祀 | 復た | 謁来す | 軫を | 此の生 |
| げつじん | そすい | けいざん | な | あわ | か | しんそ | ぞうせう | じゆうし | ま | けつらい | しんめく | こ |
| 余坑有り | 清くして | 碧 | お弧矢の旦を記す | 可し | の郊も亦た薦禱す | 当に坐に侑むべし | 此の粲を偶す | 彼の呱に及び | 微禹の嘆を作す | 乗櫟の廟 | 還らして天下の半ばなり | 終に安くにか帰せん |
| よこうあ | きよく | みどり | たん | わい | せんかん | まさ | さん | か | たん | びよう | なか | き |
| | 乱る可し | 相照らし | き | かい | ひと | す | べう | お | な | | | |

- 20 19 18 17 16 15 14
- 美石肖溫瓚
龜泉木杪出
牛乳石池漫
小兒強好古
侍史笑流汗
歸時蝙蝠飛
炬火記遠岸
- 美石
龜泉
牛乳
小兒
侍史
歸時
炬火
- 溫瓚に肖たり
木杪より出で
石池に漫たり
強いて古を好み
汗を流すを笑う
蝙蝠飛び
遠岸を記す

〔原注〕昔自南河赴杭州過此、蓋二十二年矣（昔南河自り杭州に赴くに此に過る。蓋し二十二年なり）

〔**〕有啓廟（啓の廟有り）

〔**〕謂塗山氏（塗山氏を謂う）

〔**〕謂柏翳（柏翳を謂う）

〔**〕有絲廟（絲の廟有り）

〔****〕淮南人、相傳禹以六月六日生、是日數萬人會山上、雖傳記不載、然相傳如此（淮南の人、禹は六月六日を以て生まると相伝う、是の日、万を数うる人山上に會う。伝記に載せずと雖も、然して相伝うること此くの如し）

〔****〕荆山下有卞氏採玉坑、石色如玉、不受鑱刻、取出山下、輒變色不復溫瑩（荆山の下に卞氏が採玉の坑有り、石色玉の如く、鑱刻を受けず。山下より取り出だせば、輒ち色を変えて復た溫瑩ならず）

「*****」龜泉在荆山下、色白而甘、眞陸羽所謂石池漫流者、有石記云、唐貞元中、隨白龜流出（龜泉は荆山の下に在り、色白くして甘し、眞に陸羽の所謂石池漫流なる者なり。石記有りて云う、唐の貞元中、白龜に随つて流れ出づ」と）

○元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○上巳日 陰曆三月三日の節句。禊の行事をする日であった。○子追・過 蘇軾の三子のうち、次子と三子。蘇追、字は仲豫（一〇七〇—？）。蘇過、字は叔党（一〇七二—一一三三）。『宋史』卷三三八に伝がある。蘇轍「亡兄子瞻端明が墓誌銘」（『欒城後集』卷二二）に「子は三人、長を遇と曰う。雄州防禦推官、知河間県事たり。次を追と曰い、次を過と曰う。皆な承務郎たり」とある。また、政和元年（一一一一）、蘇過四十歳の時の「仲豫兄が官に武昌に赴くを送るの叙」（『斜川集』卷五）に「仲兄は……今 四十有二とあり、二人は二歳違いであったことがわかる（『蘇過詩文編年箋注』卷八による）。元祐七年のこの時、追は二十三歳、過は二十一歳であった。○塗山・荆山 いずれも安徽省にある。塗山は、蘇軾「濠州 七絶」の「塗山」の注（『蘇東坡詩集』第二冊一二八頁）を参照。荆山は、蘇軾「郡の東北の荆山の下、溝畎を以て水を積む可しと言う者有り。……」詩の題下の注（『蘇東坡詩集』第四冊三七八頁）を参照。

1○此生終安婦 此生は、この世に生きること。蘇軾「辯才老師 龍井に退居し、復た出入せず。……」詩（『蘇東坡詩選』二六一頁）に「此の生 暫く寄寓す、常に恐る 名実の浮なるを」とあるのをはじめ、蘇軾の詩には、一句と類似する句が幾つか見える。終安婦は、ついにどこへ帰ろうとするのか、行くべき先はわからないの意。蘇軾「司馬君実の独樂園」詩の注（『蘇東坡詩集』第四冊二七五頁）を参照。2○還軫天下半 軫は、車の後部にある横木。還軾は、車に乗って諸国を流浪すること。『国語』晉語四に「若し窮困に資せんとならば、亡げて幼より長ずるに在るまで、軫を諸侯に還すは、窮困と謂う可し」とあり、韋昭の注に「軾を還すとは、猶お車を廻して諸国を周歴し、阨困に遭離するがごとし」とある。一句は、蘇軾が、たびたび外任を命じられて各地を転々とし、苦勞の多い官僚生

活を続けて、もう天下の半分ほどの地を巡ったであろうかという感慨を述べている。『四河入海』巻七の四に引く一韓智翹の問書に「一ノ天下ノ中ヲ、半分アルイタゾ」とある。3 ○謁来 謁は、発語の辞。謁来の二字で、来て、の意。蘇軾「廉泉」詩の注（『蘇東坡詩選』二七三頁）を参照。○乗標廟 標は、山中を行くとき、滑り止めなどのために、履き物の下につけるかんじきの類。禹が、治水のための諸国巡りの際に使った。『尚書』益稷に「予 四載に乗り、山に随い木を刊り、……川に距る」とあり、その孔安国伝に「載る所の者四つあり、水には舟に乗り、陸には車に乗り、泥には輶ちんに乗り、山には標に乗り」とある。『漢書』溝洫志には、禹の四載について「山行には則ち楸けすす」とあり、標を楸けすに作る。その如淳注に「楸は、鉄を以て錐頭の如くし、長さ半寸なるを謂う。之を履下に施して、以て山に上れば、蹉けす跌せず」とある。乗標廟は、禹を祀る廟のこと。4 ○微禹嘆 禹の功績を称えること。『春秋左氏伝』昭公元年の劉子のことばに「美なる哉 禹の功、明德遠し。禹微かりせば、吾れ其れ魚たらん」とある。5 ○從祀 主となる者に合わせて祭ること。『新唐書』礼樂志五に、周公以下、孔子、顔回、左丘明を從祀した、という記述が見える。○彼呱呱 呱呱は、呱呱の略で、乳飲み子の泣き声を擬したもの。彼呱呱は、啓を指している。『尚書』益稷に「予 時くの若きこに創り、塗山に娶る。辛壬癸甲、啓 呱呱として泣く」とある。〔*〕に見えるように、啓を祀る廟に因んで詠じたものであろう。柳宗元「天対」（『柳河東集』巻一四）に「彼の呱呱 克よく減す、姒しをして夏かを作おこさしむ」とある。6 ○像設 像設は、室内に死者の像を描いて祠ること。『楚辭』九歌の「招魂」に「君が室に像設し、静間にして安し」とあり、その朱熹注に「像は、蓋し楚の俗なり、人死すれば則ち其の形貌を室に設けて之を祠る」とある。また、後漢の趙岐は、生前に自分の墓を用意し、季札、子産、晏嬰、叔向の四人を描いた像を祠壇の實位に置き、自分を描いた像を主位に置いて、人々から称賛されたという（『後漢書』趙岐伝）。○此祭 祭は、美しく輝くもの。蘇軾「郡人田・賀かの二生が花を献ずるに謝す」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊五一五頁）を参照。ここでは、〔*〕に見えるように、啓の母である禹の妻塗山氏の像に因んで、禹の妻を指しているであろう。一句は、前の5句で禹の子啓に触れたのと対をなしている。7 ○秦祖 秦祖は、〔*〕に見えるように、柏翳はくえいのこと。秦の祖先とされる。『史記』秦本紀に、禹とともに治水に携わり土地を開くのに功績のあった柏翳が、舜から嬴えい氏の姓を賜り、これが秦の祖

先となったという話が見える。○侑坐 同坐をすすめる。蘇軾「御容を写せる妙善師に贈る」詩の注『蘇東坡詩集』第四冊三八八頁を参照。8○夏郊一句 夏郊は、夏の郊廟。郊は、天子が天地を祀る禘郊祖宗の礼の一つで、南郊において行なわれるものだった。夏后氏における郊では禹の父鯀が祀られた。『礼記』祭法に「夏后氏は亦た黄帝を禘にして、鯀を郊にし、顓頊を祖にして禹を宗にす」とある。一句は、「*****」に見えるように、鯀を祀る廟の祭祀が続いていることを述べる。薦は、供え物をする。裸は、香り酒を地に注いで神の降臨を願う祭り。『尚書』洛誥に「王 太室に入って裸す」とあり、孔安国注に「裸は、裸もて神に告ぐるなり」とある。薦裸で、供え物をし、酒を地に注いで神に祈ること。韓愈「南海の神の廟の碑」(『韓昌黎集』卷三二)に、南海(広州)の地で、祭祀の行ない方がいい加減で礼に適わないさまを記して「薦裸興俯、儀式に中らず」とある。9 10○可憐・尚記二句 弧矢且は、男子の誕生日。『礼記』射義に「故に男子生まるれば、桑弧逢矢六、以て天地四方を射る」とある。二句は、「*****」にあるように、禹の生日と伝えられる日を、淮水の南の地の人々が今も変わらず、祝い続けていることに感心して述べる。12○楚水 古の楚の地の一带の河川湖沼のこと。一句では、荊山・塗山の地を流れる淮水のことか。○乱 河川をわたること。『尚書』禹貢に「沔を逾え、渭に入り、河を乱る」とあり、その孔安国伝に「沔を越えて、北のかた渭に入り、東に浮かびて河を渡る」とある。13 14○別人・美石二句 别人は、足斬りの刑を受けた人のこと。温は、色つやのよいさま。宋玉「神女の賦」『文選』卷一九に、神女的美貌を写して「曄けること華のごとく、温乎たること瑩の如し」とある。瓊は、玉の一種。『周礼』冬官考工記・玉人に「天子は全きを用う、純玉なり。……侯は瓊を用い、伯は埴を用う」とある。二句は、「*****」に見えたとおり、いわゆる和氏の璧の故事を踏まえて、荊山のふもと、かつて美玉を産したという坑の跡を訪れたことを述べている。蘇軾「袁公濟 劉景文の「介亭に登る」詩に和す。復た次韻して之に答う」詩の注『蘇東坡詩集』二五四頁を参照。15 16○亀泉・牛乳二句 二句は、「*****」にあるように、荊山のふもとにある亀泉から、茶を煮るのに適した、うまい水が湧くことを述べている。木杪は、木のこずえのこと。『潤州の甘露寺に箏を弾く』詩の注『蘇東坡詩集』第三冊三九六頁を参照。石池は、鍾乳石の泉の岩間の溜まり水のこと。『*****』に見えるように、唐の陸羽『茶経』巻

下「五之煮」に、茶を煮る水の上として山水（山中の水）を拏げて、「其の山水は、乳泉の慢流する者を揀ぶは上」とある。また、杜甫「太平寺の泉眼」詩（『杜詩詳注』巻七）に、泉の湧水について「取りて十方の僧に供す、香美牛乳に勝る」とある。漫は、水のゆったりとしたさま。漫漫と同じ。蘇軾「甘露寺」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊一七四頁）を参照。17〇好古 古を敬慕すること。蘇軾「中隱堂の詩」その二の注（『蘇東坡詩集』第一冊三七九頁）を参照。〇小兒 迫と過二人のこと。一句は、二人が、5、10句に詠じるように、荊山・塗山に点在する禹にまつわる古跡を丹念に回って故事を確かめることを述べている。18〇侍史 貴人のそばに仕える記録係。祐筆。『史記』孟嘗君伝に、孟嘗君が食客と対座して語る時には、常に侍史が屏風の後ろにいて、孟嘗君が食客の親戚の居処を聞き出すのを記録したという話が見える。一句では、蘇軾のお供をする役人のことを言う。19〇蝙蝠飛 蝙蝠は、こうもり。蘇軾「済南に至る。李公拱 詩を以て相迎う。……一首」その二（『蘇東坡詩集』第四冊一七七頁）に「相従いて燭を継ぎて、何ぞ問うを須いん、蝙蝠飛ぶ時 日 正に晨なり」と見える。20〇炬火一句 炬火は、たいまつ。一韓智翊の聞書に「言フココロハ、アソコ二人ノ炬ヲ持シテ行クヲ見テ、遠岸ノ我が到ルベキ地ヲ記取スルゾ。又ノ義二ハ、帰路暮（ルル）程ニ、炬火ヲ把（リ）テ帰路遠岸ヲ心ニ記取スルゾ」とあるように、一句は、二通りに解することとが可能であるが、ここでは、日暮れて暗い中、松明の燈を頼りに帰路を歩きながら、荊山のある、遠い向こう岸での一日の遊びのあれこれがい出しされる、という後者の解に従う。〇「原注」 昔、熙寧四年（一〇七二）、蘇軾が、開封から通判として杭州へ赴任する途中、この塗山・荊山の一带を通った時のことを指す。詩題の注に引く「濠州七絶」は、その時の作である。南河は、黄河下流の一带を指す。『尚書』禹貢に「江、沱、潜、漢に浮かび、洛を逾えて、南河に至る」とある。二十二年は、熙寧四年から元祐七年まで、ちょうど二十二年である。〇「**」 5句の注を参照。〇「***」 6句の注を参照。〇「****」 7句の注を参照。〇「*****」 8句の注を参照。〇「*****」 9 10句の注を参照。〇「*****」 13 14句の注を参照。〇「*****」 15 16句の注を参照。

私の人生は最後にはどこに落ち着くのだろう、朝廷から任せられ、勤めてまわった地は天下の半分にもなった。そうしてまた夏禹の治水のための諸国巡りを記念する廟にやって来て、禹が現れなかったらこの世の中はどうなっていたことだろう、とその偉業に再び賛嘆している。

かの、禹が治水に励むさなかに産声をあげた子啓が合わせて祀られ、この見目よき妻塗山氏の像が並んで祀られている。秦の祖先柏翳は禹王の同伴として祀られていいだろう、夏の郊廟にもまたお供えをし酒を地に注いで祀っている。

なんと感心なことだろう、淮水の南の地に住む人々は、今なお禹が生まれた日を記念している。荊山は青々とまぶしく、楚の国を流れる淮水は清らかで渡ることができる。

足斬りの刑を受けた卞和が、件の玉を掘り出したという坑があって、美しい石は本物の玉そっくりにつやかだ。亀泉は梢の間から湧き出で、牛乳のようにうまい水が岩間の溜まりにゆったりと湧いている。

倅たちは飽きもせずに古の跡を慕い歩き、私が汗を拭き拭きついて行くのを、お供の者が笑う。帰路に着く頃にはもうこうもりが飛び交うほど暮れて、松明の灯りをたよりに帰路をたどれば、荊山のある遠い向こう岸でのあれこれがい出される。

(担当 原田 直枝)

一八五三(施三十三)

次韻徐仲車*

徐仲車に次韻す
じよちゆうしや じいん

- 1 惡衣惡食詩愈好 惡衣あくい惡食あくしょくにして詩愈しいよ好よく
 2 恰似霜松囀春鳥 恰あたか霜松そうしょうに春鳥しゅんちようを囀さえずらしむるに似にたり
 3 蒼蠅莫亂遠鷄聲 蒼蠅そうよう莫も亂らん遠鷄えんけいの聲こゑを乱みだすこと莫なかれ
 4 世上誰如公覺早 世上せじよう誰だれか如ごとく公こうが覺さむることの早はやきに
 5 八年看我走三州 八年はちねん我わが三州さんしゆうを走はしるを看みる
 6 月自當空水自流 月つきは自おのずか空そらに當あたり 水みづは自おのずか流ながる
 7 人間擾擾眞螻蟻 人間じんかん 擾擾じようじようとして眞まことに螻蟻ろうぎ
 8 應笑人呼作鬪牛 應まさに笑わらうべし 人ひとの呼よんで鬪牛とうぎゆうと作なすを

〔原注〕 仲車、耳聾（仲車、耳聾なり）

〔*〕 元豐八年、予赴登州、元祐四年、赴杭州、今、赴揚州、皆見仲車（元豐八年、予登州に赴き、元祐四年、杭州に赴き、今、揚州に赴く。皆な仲車に見ゆ）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○徐仲車 徐積のこと。仲車はその字。山陽（江蘇省淮安）の人。『合注』卷二六に「徐積に次韻す」詩がある。進士に及第したが、耳が遠いため役職につかず、後に楚州教授となった。『節孝集』があり、『宋史』卷四五九に伝がある。『節孝集』卷三二（附録）に、この詩を含む「蘇東坡帖」と題する文章が収録されるが、そこには「昨日、仲車先生に見ゆ。耳疾未だ甚しくは瘥えずと雖も、而して神氣已に一にして、真に道を得たる者なり。佳篇を恵まるるを蒙り、輒ち次韻して答え奉る」とある。蘇軾が次韻した徐仲車の元の詩は現存しない。

1 ○惡衣惡食 粗衣粗食をいう。『論語』里仁篇に「士 道に志して、惡衣惡食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らざるなり」とある。韓愈「荊潭唱和の詩の序」（『韓昌黎集』卷二〇）に「權愉の辞は工みにし難くして、窮苦の言は

好くし易し」とある。また欧陽修「梅聖俞詩集の序」(『歐陽文忠公集』卷四二)に「愈いよ窮すれば則ち愈いよ工みなり」とある。2〇恰似一句 大岳周崇は趙次公の注を引いて、徐仲車の詩を「其の詩は霜松清健の中に春鳥の美音有るが如し」という(『四河入海』卷一九の三)。34〇蒼蠅・世上二句 蒼蠅は、卑俗な小人、遠鶏は、高潔な君子をたとえる。『詩経』齊風「鷄鳴」に「鷄の則ち鳴くに匪ず、蒼蠅の声なり」とある。覚は目覚めること。二句は、徐仲車は耳が遠いので、蠅が鷄鳴まがいの羽音を立てても気にならず、また曉を告げる鷄の声に頼らずとも誰より早く目が覚めることをいう。徐仲車の、汚れた世から隔った高潔な人格をたたえる意を込める。78〇人間・応笑二句『世説新語』緇漏篇に「殷仲堪が父 虚悸を病み、牀下に蟻の動くを聞きて、是れ牛の闘うなりと謂えり」とある(『晉書』殷仲堪伝には、仲堪の父殷師は「耳の聴きを患う」という)。擾擾は、ごたごたと乱れるさま。『国語』晉語六に「唯だ諸侯有り、故に擾擾たり。凡そ諸侯は、難の本なり」とある。螻蟻は、けらとありをいう。『莊子』列禦寇篇に「上に在れば鳥鳶の食と為り、下に在れば螻蟻の食と為る」とある。二句は、徐仲車は耳が遠いおかげで、世間のやかましさを笑って眺めていられることをいう。

暮らし向きが悪ければ悪いほど作る詩がますますまくなるのは、あたかも春の鳥が冬の霜おく松の上で美しく鳴いているようなものだ。ハエよ、遠くで鳴くニワトリの声が聞こえないようにブンブン飛び回っても無駄なことだよ。この世でこの方ほど目覚めの早い人は他にいないのだから。

八年の間、私が三つの州を転々とするのをご覧になっていたのは、あなたが空にかかる月の如くに動かず、私は水のようにあちこち流れていったようなもの。蟻が群がるようにごたごたしたこの世間を、牛の喧嘩だと言って騒ぐ人々など、あなたにとってはお笑い種でしょう。

一八五四(施三二四)

次韻林子中春日新堤書事見寄

林子中が春日の新堤にて事を書して寄せらるるに次韻す

三〇

- | | | |
|---|----------|------------------|
| 8 | 連江夢雨不知春* | 江に連なる夢雨 春を知らず |
| 7 | 爲報年來殺風景 | 為に報ず 年來の殺風景 |
| 6 | 笑我花時甌有塵 | 笑う 我れ 花時 甌に塵有るを |
| 5 | 羨君湖上齋搖碧 | 羨む 君 湖上 齋の碧に揺くを |
| 4 | 卻爲淮月弄舟人 | 却って淮月に舟を弄する人とな爲る |
| 3 | 收得玉堂揮翰手 | 玉堂に翰を揮う手を収め得て |
| 2 | 幙被眞成一宿賓 | 幙被 眞成に一宿の賓 |
| 1 | 東都寄食似浮雲 | 東都に寄食して浮雲に似たり |

〔原注〕來詩有芍藥春句、揚州近歲率爲此會、用花十萬餘枝、吏緣爲奸、民極病之、故罷此會（來詩に「芍藥の春」の句有り。揚州 近歲 率ね此の會を爲すに、花十万余枝を用い、吏 緣りて奸を爲し、民 極めて之に病む。故に此の會を罷む）

元祐七年（一〇九二）、五十七歳の作。

○林子中 名は希、福州（福建省）の人。進士及第の後、蘇州・杭州等の知事を歴任し、礼部・吏部尚書、翰林学士に至った。『宋史』卷三四三に伝がある。新堤は、杭州西湖の蘇公堤のこと。蘇軾が知杭州の任にあったとき、白居易が築いた白公堤を継ぎ、西湖を浚って新たに堤を造った。後任の林子中がその堤を蘇公堤と名付けた。蘇堤とも言う。林子中の元の詩は現存しない。

12 ○東都・幙被二句 東都は、開封（汴京）のこと、東京とも呼ぶ。寄食は、他人の家に身を寄せて生活すること。

『戦国策』齊策四に、「齊人に馮諼ふうげんという者有り、貧乏にして自ら存すること能わず、人をして孟嘗君に属せしめ、門下に寄食せんことを願う」とある。浮雲は、移り変って定めないことのたとえ。杜甫「賛上人に別る」詩（『杜詩詳注』巻八）に「是の身は浮雲の如し、安くんぞ南北を限る可けん」とある。幞被は、ふろしきで衣服や寝具を包むこと。『晉書』魏舒伝に「入りて尚書郎と為る。時に郎官を沙汰せんと欲し、其の才に非ざる者は之を罷む。舒曰く、吾れ即ち其の人なり」と、幞被して出づ」とある。一宿は、一晚のみ泊まること。『春秋左氏伝』莊公三年に、「凡そ師の出づる、一宿を舍と為し、再宿を信と為し、信を過ぐるを次と為す」とある。二句は、蘇軾が都に身を寄せる時間の短さをいう。34〇取得・却為二句 玉堂は、漢代の玉堂署という役所のことで、学者の勤める場としては後世の翰林院に当たる。『漢書』李尋伝に「久しく玉堂の署を汚す」とある。玉堂揮翰手は、翰林院で文章を綴る人、すなわち翰林学士のこと。欧陽修「郊に出て田家の蚕麦さんばく已に成るを見、慨然として感有り」詩（『欧陽文忠公集』巻九）に、「玉堂に翰を揮う手を収め取りて、却って南畝に鋤犁を把るを尋ぬ」とある。淮月は、揚州周辺を照らす月のこと。蘇軾は元祐六年三月、杭州を離れて都開封で翰林学士となり、ほどなく知潁州に転じ、翌年三月には知揚州に転じた。二句は、その転々とした役人生活をいう。5〇揺碧 林子中の書齋は西湖に面し、そこが碧水に揺れ動かされていること。6〇甌有塵 甌は、こしきのこと。甌に塵が積もるとは、生活が貧乏で、長らく食事の支度をしていないことをいう。『後漢書』范冉伝に「止まる所は單陋、時有りて糧粒りょうりゅう尽くるも、窮居して自若、言貌改むること無し。閭里之を歌いて曰く、甌の中に塵を生ず 范史雲、釜の中に魚を生ず 范萊蕪」とある（范冉の字は史雲で、後漢の桓帝のとき萊蕪へ山東省）の長となった。78〇為報・連江二句 殺風景は、俗っぽくて趣がないさま。興ざめなこと。李商隱の作とされる『義山雜纂』上「殺風景」に「花の間に道を喝す、花を看て涙下る」など、美しい風景を台無しにする行為が列挙される。連江夢雨は、細雨が江上に降りそそぐさま。王昌齡「芙蓉楼にて辛漸を送る 二首」その一（『唐詩品彙』巻四七）に「寒雨 江に連なって 夜 吳に入る、平明 客を送りて 楚山 孤なり」とある。李商隱「重ねて聖女祠に過る」詩（『李義山詩集』巻五）に「一春の夢雨 常に瓦に飄り、尽日の靈風 旗に滿たず」とある（夢を猛に作るのは誤り。清・馮浩『玉谿生詩集箋注』巻二）。○〔原注〕揚州の芍薬は世に知られ、從來そ

の多くの花を用いた「万花会」が行われていたが、その害が甚だしく、蘇軾が赴任したときこれを止めさせた。「楽を以て民を害す」文『蘇軾文集』巻七二にその経緯が述べられている。

しばらくは浮き雲のように都に居候し、その後は転々と一夜の宿を乞うて歩く行脚僧のような姿である。翰林院で揮った筆の腕前をひとまずおさめ、意外や淮水の月の下で舟を操る人となった。

西湖のほとり、あなたの書齋が煙波に漂っているさまはまことに羨ましい限り。こちらは笑うべきことに、芍薬の季節を迎えても甌こしほに塵がたまる始末（で、祭りのご馳走も作れない）。あなたにお知らせします。近ごろ当地は至って殺風景、長江に連なる雲夢の沢たの雨に降り込められて、春の飲のびをも知らぬありさまなのです。

（担当 蔡 毅）